

ベトナムの経済発展を農村からみる

——坂田正三著『ベトナムの「専門村」——経済発展と農村工業化のダイナミズム——』

研究双書No.628、アジア経済研究所、2017年3月——



坂田正三

●専門村とは何か？

本書のタイトルになっている「専門村」(làng nghề: 英語ではcraft villages)は、おもにベトナム北部の紅河デルタ地域に点在する、農村工業の集積地である。陶器、竹細工、木工品、金細工などの伝統工芸品から、プラスチック製品や再生紙といった日用品、鉄製品、レンガなどの建築資材まで、さまざまな製品が専門村で生産されている。小規模な村では数十世帯が農業の傍ら家内工業を営んでいる一方、大規模な村では出稼ぎも含む数千人の労働者が働き、大型の機械を導入している企業も存在する。ベトナム統計総局が実施した2011年農業センサスの結果によれば、ベトナムには1322の専門村があることになっているが、3000村以上あるという調査結果もあり、ベトナム全体の実態は正確には把握されていない。

専門村はまさに一村一品の村であり、たとえば鉄鋼の村ではほとんどの住民が鉄鋼製品の生産に従事している。ただし、よく見てみると、そこで作られる製品には鉄筋やワイヤー、釘など、バラエティがある。また、原料である鉄スクラップの売買や運搬、めっき、機械修理など周辺のさまざまな専門業者も多数存在しており、ハノイやホーチミンからやってくる商人たちも含め、取引や分業の複雑な生態系が形成されている。

本書は筆者による10年にわたる専門村での調査をまとめたものである。筆者は10年間で15カ所ほどの専門村で調査を行ってきたが、そのなかでも、質問票調査を実施するなど、比較的時間と労力をかけて調査してきた4つの専門村が本書の舞台となっている。それらは、鉄鋼の村チャウケー、螺鈿細工の村チュエンミー、木工家具の村ドンキとフォンマックである。そして、ドンキやフォンマックの労働者の供給源であるミャウミンという村の家計調査結果も掲載した。本書では、専門村の家内企業の経営者たちの戦略、労働者の雇用環境・労働条件、技術移転、売買ネットワーク、生産地の地理的拡大など複数の側面に焦点を当てて実態の分析を試みた。

●ベトナム経済の象徴としての専門村

筆者が研究テーマとしてベトナムの専門村に注目し、研究を続けてきたのは、そこで起こっていることが、2つの点で今日のベトナム経済の特徴を象徴していると考えたからである。そのひとつめは農村における非農業経済部門の拡大である。農家が世帯平均で約0.25ヘクタール（日本の農家世帯当たりの水田の平均面積は約2ヘクタール）という狭い圃場しか持たない紅河デルタ地域の場合、農村世帯が非農業部門の仕事で生計を立てる傾向は特に顕著にみられる。紅河デルタ農村は、ドイモイ開始以前から北部山岳や中部高原の「新経済区」へ、あるいはホーチミンなど都市部への出稼ぎ労働者の供給源であった。しかし今日では、農村に立地する工業団地や専門村のような農村における非農業部門での雇用機会が増加し、遠隔地への出稼ぎは減少している。

調査から、個人の属性と非農業部門の就労の傾向との関係も明らかになった。若い女性は外資も含むフォーマルな大企業に就業する一方、専門村の労働者になるのは若い男性、特に高校卒業以下の就学歴のものである。そして、専門村の若い労働者たちは、数年から十数年雇用労働に就いた後、独立して家内企業の経営者になるという傾向もみられた。農村育ちで（おそらく経済的理由や学業成績により）高等教育が受けられないという労働市場でのハンディキャップがあっても、農村の若者にはまだ、農村で家内企業を興して経済的に豊かになるという夢をみる余地があるのである。

農業以外の経済活動が農村を支えるという現象は、今日のベトナムだけにみられるものでは決してなく、1990年代には、東南アジアや中国の農村工業に関する研究は日本でも盛んに行われていた。しかし、現在、農村工業化研究はやや下火であると筆者は感じている。中国の郷鎮企業の一部のように、大規模化・近代化して、既に農村工業とは呼べないスケールに発展してしまっただけの例もあるとはいえ、現在でも農村工業の存在は研究に値する重要なテーマであると考えられる。

専門村が象徴するベトナム経済の2つめの特徴は、経済活動と経済主体の多様化である。国家の計画に基づき国有企業や合作社（協同組合）による生産活動しか行われていなかったベトナムでは、物資は常に欠乏ぎみであった。しかし、1986年の「ドイモイ」路線による経済自由化後、それまで生産されてこなかった新たな製品の需要が生まれ、また、計画のもとで画一的な品質のものしか作られてこなかった時代とは異なり、高級品から汎用品まで品質面でも多様な需要が生み出された。そのような需要の一部、特に低品質・低価格品の需要を満たすことでドイモイ開始直後の1990年代から成長してきたのが専門村である。

ドイモイ開始以前から、個人（世帯）による経済活動は一部認められていたが、ドイモイ開始後もまず自由化されたのは個人の経済活動であり、民間企業の設立要件が緩和されるのは、2000年の企業法施行を待たねばならなかった。そのため、1990年代には、ベトナムで「個人基礎」と呼ばれるカテゴリーの小規模な家内企業が急増した。さらに、企業設立が制度上は自由化された後も、税金や社会保障費の支払いを嫌って、多くの経営者が事業所登録を個人基礎のままにして労働者とも長期雇用契約を結ばないことを選択してきた（ベトナムの社会保障費は、社会保険、医療保険、失業保険合わせて給与の32.5%、うち雇用者側負担が22%と、東南アジア諸国のなかでは最も高い）。2000年以降、年平均7%近い成長を続けてきたベトナムにあって、外資企業や大規模な民間企業だけでなく、小規模な家内企業の数も、それらが集積した専門村の数も増え続けている。このような経済活動、経済主体の多様化という実態は、ベトナム経済研究のなかではこれまであまり注目されてこなかった。

●ローカルな工夫のおもしろさ

筆者が専門村の研究を続けて来たもうひとつの大きな理由は、いつ行っても何らかの新鮮な驚きがある調査の楽しさにあった。はじめて訪れた専門村は車の廃バッテリーから鉛を取り出すリサイクルの村であったが、バッテリーを手斧で破碎し、取り出した電極板をただ火にかけて溶かして鉛を回収するという荒っぽいビジネスであった。発想の奇抜さというか、やっていることの大膽さに驚かされたことを覚えている。専用の機械は用いず、鉛を溶かす炉も手作りである。当然

環境汚染と労働安全が問題となり、現在その村では鉛リサイクルは行われていない。どこからか市場の情報（海外市場も含む）を仕入れ、とりあえず手近なものを使って始めてみて、儲ければ規模を拡大し問題があれば撤退するという試行錯誤で発展してきたのが専門村である。

技術導入も試行錯誤である。さまざまな専門村で、中国や台湾、日本などから輸入された中古の機械、設備類を数多く目にしたが、その多くには取扱説明書が付属しておらず、あっても中国語や日本語のものしかない。機械のなかには半分ぐらいの機能が壊れているものもある。それをあれこれ試しながら、時には目的に合わせて改造を加え、使えるようにしていくのである。構造の比較的単純な機械（たとえば油圧プレス機など）であれば、経営者が既存の自動車部品などから手作りしてしまう。

それ以外にも、機械と労働者の組み合わせ、生産性を上げるインセンティブが付与された雇用慣行（グループへの生産委託、出来高払いと固定賃金との組み合わせ、見習い工制度）、販売のリスク回避のための商慣行など、専門村の家内企業の経営者たちに話を聞くたびに、なるほどねえ、と感心させられてきた。そのようなローカルな技術的・制度的工夫に関する情報を収集しながら、その工夫の背後にある資金や制度の制約とその制約下での合理性について考えながら10年間の調査を続けてきた。

本書では、労働経済学や技術移転論、インフォーマルセクター論など、複数の理論が一見脈絡なく参照されている。まず専門村で起こっているさまざまな現象を観察し、その面白さや意味を多面的に、かつ国家の経済発展のなかに位置付けて理解しようというアプローチをとったために、そのような構成となった。ひとつひとつの分析に深みが欠ける感は否めないが、本書を通してベトナム経済のダイナミズムを伝え、その将来を展望するためのきっかけを提供できたのではないかと考えている。

（さかた しょうぞう／アジア経済研究所 東南アジアⅡ研究グループ）